
CUPID'S DEAD

kishegh

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C U P I D ' S D E A D

【Nコード】

N 4 3 7 4 P

【作者名】

k i s h e g h

【あらすじ】

テンプレテンプレ・・・（ー）ニヤを目指します。

黒い話は心にダメージが来るんじゃない、楽しい話も書きたいんじゃない
と言うことで、今回のお話になりました。

ムシャクシャシテヤッタ・イマハハンセイシテイル。

EXTREME (前書き)

もう一つのお話も、軌道に乗っていないのに、思いついたので始めました。

こちらにも異世界物ですのう。まあ がんばろう俺。

この小説には、多少の残酷描写などが出るかもしれませんが、基本はコメディのつもりです。

EXTREME

「どうも、初めまして、女神です。」

「一応、こう言つべきか。叫んでおこう。」

「『『『オイツオイツ』』』」

目覚めたら、十七歳教の教祖様みたいな方が目の前にいました。

「で、ここは何処です、というか、貴方は誰です。」

「はい、ここは、説明が難しいですが、私は、女神ですよ。聞こえませんでしたか?」

女神様?じゃあ何か?一緒に居たいと言つたら、一緒に居れるのか?お助けしてくれるのか?

「お助けですか?そういつたことは、あまりしていませんね。基本的には、放任ですから。」

んー?声に出したか?んー?混乱、ウフツ。・・・・・・気持ち悪い・・・・・・

「ん、たしかに、気持ち悪いですね、声には出していませんよ。女神ですから、考えくらは読めるんです。」

「では、その女神のコスプレをした人はここで、何をしていらっし

やるんですか？痴女ですか？我らの愛する、井上喜久子お姉さまを、汚しましたら許しませんよ。」

コスプレの一環ならばまだ許すが、自身を女神などと、レイヤーの風上にも置けぬ。そもそも、全然似ていない、見た目的には、むしろスクルド……って、違う。

「いやあゝ、その女神様とはゝ、関係は無いんですがゝ。」

「じゃあ何だ、いやあゝ女神様か？いやあゝ女神様だってか、このトンチクシヨウ。とりあえず、何が起きておるか説明せい。」

声高に、ズビシツと、指し示した。

「何で、そんなに偉そうなんですかゝ？私女神なんですけどゝ？」

「そんなもん、混乱しているからに決まっている。さあ、説明せい！」

「逆ギレですかあゝ？まあゝいいですけどもゝ。」

「えゝとおゝ。貴方はゝ、お亡くなりになりましたゝ。」

「へ？」

不思議不思議、いや不思議。

「へ？」

「ですから、死んだんです。サクツと説明しますと、貴方が生きてると困るので、満場一致でお亡くなり、南無。」

手を合わせるな……縁起でもない。死んだ？俺が？

「まあ、正確には死んでいないんですが。」

「え？？？？」

「その当たり説明が難しいので、説明役は、つけておきますので、その者に聞いてください。」

いよつこいしょとばかりに、大きなハンマーを振りかぶる自称女神。どうやって持つてるんだろう。あれはウレタン素材とかか？

「では、いってらっしゃいませ。」

ハンマーは、正確に俺を吹き飛ばした。

――何すんの――いきなり！――

EXTREME (後書き)

唐突にはじめてみました。

バカ話を書きたかったのです。

なんじゃこりゃー

「何さらしてくれとんのじゃー！！！！」

起き上がってグリコマーク。誰も居ないよねー居たら恥ずかしいー。

ってー居たー

「あの一。」

「放って置いてください、今から穴掘って埋まりますから。スコップとかあれば貸してください、そして砂をかけてください。」

スーパーネガティブキャンペーン。なんじゃこりゃー、ジージャン並みに、なんじゃこりゃー！

「あの一？大丈夫ですか？」

「すみません、忘れて下さい、何か変な夢見てしましまして。」

「いえ、あの一。夢じゃないですよ、現実ですよ。」

「何を仰います。あれが夢でなかったら、私は二次元の住人になります。まあ、ほぼ確定的に、ええ、現実に画面に飛び込みます。」

「いえ、そうではなくて、僕は女神様に付けられた説明役でして、良かったら、話を聞いていただけたらなーと。」

「それこそ、何を仰るウサギさん。女神様なら、この間ラジオで話してましたよ、近々ODAで、コミックス同梱らしいですね、個人的には、日高のり子さんvrも嫌いでは無かったですよ。人に言うて微妙といわれますが。日高のり子さんと山口勝平さんって、それどんなランマですけど。」

「いえ、そうではなくて。」

「日高のり子さんといえば、炎の転校生の歌はカオスですよね、特に作者vrは、でも、なぜか中毒性がね。」

「ですから。」

「あの作者なら、逆境ナインもいいですよね、ゲーム化の話があったそうですが、実現してたらどんなくそぐいや、グフン、ゴフン。まあ、話を戻しましょうか。」

「そうです、話を戻しましょう。」

「ええ、話を戻して、井上喜久子さんといえば、金田朋子さんの掛け合いが、もう神というか何と言うか・・・」

「そこじゃないです！女神様の話です。」

「だから、女神様の話をしているじゃないか。さっきからなんですか、君は？」

「貴方の方こそなんですか！」

「必死こいて現実逃避しとるのが分からんのかつ。なんで、羽が生

えて、浮かんで、小さいんだ君は、ピクシーか？ピクシーだとも言いたいのか。二度見したわっ。久々に二度見したわっ。」

妖精君が、ため息をつく。あゝかわいー、すごい可愛い。可愛いから帰ってー消えてー、300円あげるからー。

「何か不穏当なことを考えてますね、止めて下さい。その辺りのことも含めて話しますから、聞いてください。」

むうー、このエスパーめ。しょうがないかー聞いてあげよう。

「うむ。」

「偉そうですね、まあいいです。まずここは、貴方のいた世界ではありません。異世界です。」

「異世界ね、うんテンプレ、テンプレ。」

うんうん。

「貴方は、女神様にこの世界に、飛ばされてきました。基本的に、元の世界には帰れません。」

「帰還不能ね、うんテンプレ、テンプレ。」

「貴方には、特別なすごい力が、加わっています。はっきりいって最強です。」

「うん最強ね、これもまた、テンプレ。」

「それじゃあ、今から一回死んでください。」

「うん、死ぬのね、これもテンプレ、テンプレ。」

????????????????え？

へ（「ω「へ）アーコリヤコリヤ（ノ「ω「ノ

「どどどどどどどおゆーことじゃー。死ぬ？死ぬの？何でWHY、え？うそ？もしくは冗談？死ぬならハッスルしてから死ぬ、ハッスルする、そう、略して、ハッする。」

「うるさい、いいから死んどけ。」

指差されたら、何か渦を巻いています。

妖精なのに喪黒福造？うしろで、どーーーーーinn……

えー腹上死とは言わないけれど、せめて、可愛い女の人に看取られて死にたい。もしくは松田勇作。

あ、言い忘れてた。

「なんじゃこりゃーーーーー！」

てきとつじゃね？

「死んだー、ヘブンなうー！」

再び寝起きは、グリコマーク、両手を挙げてバンザイ。

「ハッ、いかん、何時までも同じ事してたらバカと思われる。自重自重。」

「貴方は、自重もそうですが、自嘲しなさい。」

「んっ！そこに居て、何かうまい事言ってるのは、妖精さん。同音異義語だから、漢字で書かないと、分からないよ、実際。」

「どうしても、良いです。それよりも、死んだ感じはどうですか？」

「いや？死んでないよ。死んでたら、今ここにいないもんよ。真理じゃね？けっこう真理じゃね？これ。」

「いい加減に、落ち着いてくれませんか？神になる方なんですから。」

「死んだら転生先はカツラ？それって酷くない？無機物は嫌よー、生きてないもの。それとも、毛根とかになるの？あれは生きてるけど。」

「誰が頭に生えろと、言いましたか。神様です、GOD、ヤハウエ、八百万のあれです。」

「冗談はおよしよ、妖精さん。W H Y俺が神に？って言うか成れるもんなの？そしてなぜ急に、そしてなぜ俺？」

「だから、それを今から説明します。分かったら聞いてください。」

ややキレ気味で答えてくる。でも、見た目がかわいらしいので全然怖くない。むしろ、何か良い。思ったら、にらまれたので正座で話を聞く。

「先生お願いします。」

「貴方は、元いた世界とは別の世界にいます。なぜかというと、女神様がここに連れてきたからです。そして、それは他の神々が、全員一致で決めたからです。だから今貴方は、此处にいます。そこまでは良いですか？」

「はい、先生。」

「よろしい、では続きです。」

何時の間にやら、妖精さんはメガネをかけている。それをクイツと指であげて話を続ける。メガネの妖精って新機軸じゃね？ちびっ子メガネのDX版というか、これはいいものだ。

「いいから、よく聞きなさい。貴方は、あのまま元の世界にいと高確率で、世界を悪い方向に持って行きかねませんでした。ですから、神々が、影響の無いうちに他の場所に飛ばす選択を取ったのです。そして、そこまで影響を与えるのならば、神の一柱としても良いという話になったのです。」

「神様は、未来が見えるということですか？」

「それも説明します。答えは、完全ではないです。他の世界においては、神は全能、何でも出来ます。当然未来も完全に分かります。ですが、貴方のいた世界は、そうは行きません。」

「何ですか？」

「簡単に言うと、神様候補を選出する世界だからです。ほとんどの神様は、貴方と同じ世界から選出されました。元の世界なので、その世界には影響を受けてしまうのです。ですから、貴方のいた世界においては、神様は全能ではありません。でも、かなりの力を持ちます、貴方は、限りなく黒に近い灰色として、影響を与える前に、此处に飛ばされました。」

「あの、疑わしきは被疑者の利益につて言葉があるんですが。確定してないのなら今からでも戻れませんか？何とか話を通してくれませんか？おとなしくしておきますので。」

「さっきも言いましたが、無理です。原則として、元の世界には戻れません。唯一の例外は、貴方が神になってからです。」

「無茶苦茶だなー、話が大きすぎて、驚きもしない。本当のパニックってこんなものかな？地味に冷静。」

「それで、俺はこの世界でどうしたら良いんでしょう。」

「さっき、力をくれると言ってましたが、才能無いですよ。趣味は、読書とPCでそれも、ネットとかですから。ゲームとかも作ったこ

とはありますしHPも持ってますが、別にプログラミングとか出来るわけじゃありませんし、頭も、悪くも無いけど良くも無い、そんな所です。ええ。

身体もね、運動得意でもなく、喧嘩はしたこと無いので分かりかねます。はい。でも強くは無いんじゃないかな？身体小さいですし。ええ。168cmです、身長。痩せ型です、体重はこの所量ってないです、だから良く分かりません。まだ成長期ですがね。ええ。

「特にありません。好きなようにして下さい結構だそうです。」

「え？」

てきとうじゃね？

はだかー……裸？

「え？」

聞き間違いかな？むしろ危機間違いかな？何そのテキトウ？

「ぱーどうん？」

「ですので、好きに生きて下さって結構です。」

「何か魔王を倒せとか、世界を救えとかは？テンプレ的に。」

「しなくてけっこうです。魔王はいませんし、世界も救われるほど困っていませんから。貴方がこちらに来たので、元の世界は救われていますよ、もう十分です。なんでしたら、貴方が魔王になっても結構ですよ。魔王でも、神でも、現人神でも、勇者は難しいかもしれませんね。倒す対象がいけませんから。」

「魔王居ないの？」

「居ません、なんでしたら創りますか？魔王を。自分で創って、暴れさせて、それを倒せば勇者様ですね。」

「何そのマッチポンプ。いや、別に戦いたいわけじゃないから、良いけど。何で、この世界に対しては、そんなにぞんざいの？やっぱり此処は、テーマパークとかで、君もロボトー？」

もしくは、アンドロイド？人型ではあっても、サイズがないから違うかな？

「今更、その話を蒸し返さないでください。全て事実です。この世界に対してぞんざいなのは、いまだ無神階の世界だからです。」

「無神経？歯でも抜いたの？そういえば俺、明日は医者予約があるって、今絶賛仮詰め中なんだけど、治療はどうしたら。」

この世界って歯医者さんいるの？

「無神階です。神の無い階層世界です。いわば、出来たばかりで、管理者のいない世界ですね。最悪、作り直すのも直ぐですので、壊してしまっても構いません。」

「態々めんどくさいよ、それよりも、歯の治療、カブセが外れかけなんだよね〜仮詰めだから。」

「自分で治してください、力の使い方も、後で説明しますよ。そうですね、貴方は死んだら神様ですけど、此処できちんと修行してから、神になったほうがいいですよ。神様になって、他の神様の雑用ってのも嫌でしょ。」

「神の雑用って何よ？」

「色々あるみたいですよ。詳しくは知りませんが。」

何してるんだろ、ドジッ娘な神様とかも居て、書類ひっくり返したりするんだろ？それはそれでいいな。仲良くなって頼られたりとか。

「新入社員の洗礼みたいなの？」

「どう転んでも違うと思いますが。まあ、いいでしょう。無駄話が長くて、私の居られる時間が、あと僅かです。知識や情報等は残していきますので、貴方の好きなような御使いを、創り出してください。」

「どうやって？て言うか、何それ？」

「どうやって？」

「分からなかったら素直に質問。うん、大事。」

そう聞くと、空中に、うつすら光る球が現われた。いや、チョットグニグニしてる、スライム？」

「これは、女神様が、持たせてくれた卵です。これを核に、貴方の欲しい従者、御使いを創って下さい。後で色々変更は出来ますが、見た目などは小動物が良いと思いますよ。目立ちにくいですし、使う力も抑えられます。」

小動物？ハムスター？でもなーハムスターは夜行性だしなー、ぐうたらなイメージがあるなー。もっと、こっ機敏な、スポーティーなそんな小動物。居ないかなー、フィッシュ武中さん？墨のプールの泳がれても嫌だし、小動物じゃないし。」

「早くして下さい、時間がありませんよ。」

時間ねー、時間が無い、時間が無い。モンティ・パイソンでそんなネタがあったな。もう見れないのか、モンティ・パイソン。せっかくDVDボックス買ったのに・・・クスン。映画なー、グレムリン

？可愛くない。C3PO？野沢那智さん・・・クスン。モンティ・パイソンといえば、納谷五郎さん。納谷五郎さん、ユパ様、ナウシカ？キツネリス・・・キツネリス・・・いいんじゃない？

「イメージ確定、キツネリス。」

「それでは、イメージをこの卵に向けて下さい。後について答えて下さいね。」

- 我が真名において
存在を与えん

創りたるは

調停の司

天秤の支柱

我が側背に在らんことを

我が前に在らんことを -

わお、ちゅうにーちゅうにー厨二病、何だろう、涙が出そう。憤死しそう。

ぽんっ

昭和の、魔法少女物の様な気の抜けた破裂音がした。うわー、ださーい。

「完成ですね、チョット力を込め過ぎですが、まあ良いでしょう。あとは。」

完成？チョット大きくなって黄色くなっただけ、まだ丸いグニグニ？

おー変化・・・しない？なにこれ？

「それでは、僕はこれで失礼します。後のことはこの娘に任せますね。」

「あ、どうもありがとうございましたー。」

「それではー。」

妖精さんは、光になって空へ上がっていった。昇天？光の一部が、丸いグニグニの中にはいる。

光る丸いグニグニが大きくなって、スモークが焚かれた様になり。

煙が晴れると。

裸の女の子が寝ていました。

「はだかー、そして耳ー。」

やっぱり叫んで終了。

早く言いなさい

「はだかつ、ではないのか？」

よく見ると、毛皮みたいなの？なんだろうこれ？チャムとか？間違ってもトラ柄ビキニのラムちゃん？獣人？みたいな。

ためしに、手のひらを触ってみたら肉球がある。ぷにぷにーきもちー。

二の腕を触ってみたら、普通の人の肌だった。二の腕って、胸の柔らかさとか言うよね……。やわいのおーきもちえー。

肩を触ってみたら、毛皮だった。ふさふさ、いーよねー、癒されるーいやしーいやしーって伸ばすと、厭らしいみたいだよー否定はしない。

ぷにふわやわを楽しんでいると（楽しいなら良いけど愉しいって書くて厭らしい）、目が覚めたようだ。

「んー？マスター起きて直ぐですか？お元気ですねー。」

そあい。

脳天に、スコツとチョップを入れる。勿論軽めにだが。

「何されるんですか？マスター。」

ちヨット涙目なのが可愛い……ってそうではない、そうでは二ーだよ。

「チミは何者だね？名前は？」

「マスターが創ったんですよ、基本的に。名前も、マスターが決めて下さい。」

あー、そうでしたー。てへ！……かわいくない。

名前かー。どうしますかね？んー目綺麗だなー、強そうだし、んー。

「玻璃。」

「え？」

「玻璃にしよう。強くて綺麗な鉱物。目が水晶みたいに綺麗だから。」

「はいっ。私は玻璃です。マスター。よろしくお願いします。」

「しかし。」

小動物、ぶつちやけ Kitsuneri をイメージしたのに、なぜゆえムツチリボデーの女の子？俺の超心理でも作用したか？そうだと言うならば、グッジョブだ俺の超心理。

「しかし、女の子だったのね。しかし、小動物をイメージしたのに、何で？」

「マスターが、力を入れすぎたからです。ああ、でもおかげで、色々と出来ることが多いです。」

「そうか、そうか。とりあえず、服とかはありませんかね？一寸恥ずかしい。」

「そうですか？私は、マスターの物ですから、何でもして良いんですが。まあ、マスターがそう仰るなら。」

何処からか、服を取り出して着ている。これも、女性の着替えを、見たことになるのか？経験値プラス？微妙だな。

「服、何処から出したの？魔法？魔法が使えるの？俺も使えるの？」

あれー？おバカさんを見るような目で見られたよー？蔑まれてる？これはこれで、悪くない。我輩の業界ではご褒美ですよ、やふー！。

「マスターは、何でも出来ますよ。少なくとも、想像した限りの事については、出来ます、不可能なんてありません。妖精さんも言うてましたよ。マスター。あーでも、想像の上ではですから、マスターが認識できないことは、無理です。たとえば、すごく遠くで、勝手にこける人を助けることは出来ません。あらかじめ用意とかが必要です。」

「認識できるかどうかが問題？何打その観測論？まあいいか。それでは。」

パチン。

指を鳴らすと、目の前にたくさんの料理が現われた。

「自分が、造り方知らない料理とかでも出来るのね。ということは何だ？補正作用でもあるのか？良く分からんな。」

「マスター、これ忘れてました。女神様からだそうです。」

一冊の本を取り出す。同人誌みたいに薄いぞこれ、何処のコピー誌だこれ？

「女神姉さんの初心者用マニュアル・完全版。恥しがらずに叫んでみよう。」

・・・・・・・・・・後で読もう。

「玻璃、これ一寸持つておいて。後で読むから。とりあえず食べよう。」

「はいマスター。」

なんか、耳の後ろに入れていた。孫行者か？何でも出せるなら、？斗雲でも出してみよう、あとで。

げふう。

「うー、食った食った。こんなに食ったのは生まれて初めて、あ、一回死んでるからどっちにしても生まれて初めてか。」

「私は、さっき生まれたので、正真正銘生まれて初めてですね。」

美味しかったです、ありがとうございました。マスター。」

「いえいえ、お粗末さまです。」

さてと、このまま此処にいても仕方が無いし。どっか行つて見ますかね。

どんな力が手に入ったのかも、興味があるし。

「玻璃、小さくなれるか？」

「キツネリスの姿になれば良いですか？」

「ああ、それで肩に捕まっておいてくれ。空を飛ぶから。」

「はい。」

シュツと小さくなると、肩に乗ってくる。かわいいー、いいのお、癒しじやのー、後で、肉球で、ほっぺたぺちぺちしてもらおう。

「行くぞ、キント雲。」

宙を切つて、とんぼ返りをする。

「呼ばれて出では、？斗雲。一飛び十万八千里。」

バビューン。

「まあ、そこまで早く飛んだら、何も見えないといけないから、鈍行で。」

「何のための見得だったんですか？マスター。」

「形式美は重要だ。」

「だったら、一飛びですよ。本当は。」

「さすがに、飛行中に宙返りを繰り返すのはなあ。マイナーチェンジということで、まあ一つ。」

「別に、マスターの術ですから、全然構いませんけど。」

「うむ、気にしても詮無い事は気にしない様に。」

「はい、マスター。」

テテテテテテテテテテ……

のどかな音で飛ぶなー、何だか気持ちい。ん？

「雲に悲鳴が刺さった。」

「どういうことですか？マスター。」

「雲中子の雲もイメージしてたから、この下に困ってる人が居るみたいだね。どうするね？助けてみる？」

「それは、マスターの好きなようにすれば良いんじゃないですか？」

「では助けてみましょうか。」

急降下してみると、西洋の馬車を、盗賊らしき者たちが襲っている。
馬車の上に降り立ち、見得を切る。

「おうおうおうおう、この俺を誰と心得る。傲来国は花果山の、水簾洞が主、斉天大聖孫悟空様だあ。」

あれ？反応が無い？

「マスター、言葉通じてませんよー。」

早く言いなさい。

貴様らに名乗る名前は無い。

いーやーだー。はーずーかしーいーいー。

あ、でも、何言ってるのか分からなかったなら、被害は最小限だな。

不幸中の幸い……。でもお、はずかしいー。

「マスター、皆さん、怒ってるみたいですよー。」

え？

「玻璃、言葉分かるの。」

「マスターも、切り替えたら分かりますよー。」

切り替える？俺にスイッチは無いが……。ん？

「ぱぱらぱっぱー。翻訳ナタデココの山ぶYO風・南方のかほり。」

言ってみたら出来たよ、オイ。まあ、深く考えないように、そうしないと正直きつい。

食べましたー。

分かりましたー（ワタナベアツシ風）

「何をごちゃごちゃと、分からない事をほざいていやがる。」

フム、背景に光が無いのが残念だが、せつかく高い所にいるんだ。

「他者の、持つ物を、奪い、攫い、傷付ける。人の命と物を奪い、それを恥じぬ者達。人、それを、強盗と言う。」

「なんだと、テメエ。」

誰だ、とか聞いて欲しかったな。（何だ、と聞かれていたら、「とんでもねえ、わたしや、神様だよ」だったが）だが、かつこいい方で行こう。

「貴様らに、名乗る名前は無い！」

「くそつたれがあー」「」「」

悪人一山198がわめく、うーむ、没個性。せめて、モヒカンくらいはしていて欲しいものだ。張り合いが無い。

行くぞ、ロム兄さんの必殺技。

「とお、天空真剣……剣が無い！」

「バカめ、丸腰で何ができる。」

「マスターア。」

あ、呆れてる。こうなっては仕方が無い。

「ならば、天よ地よ、火よ水よ、我に力を与えたまえ。」

「パールツフォーウメイション」

いえ、変化はしませんよ……

「今度こそ食らえ、サンダースマッシュ。」

パンチだキックだチョップだ。いまだ、必殺天空宙心拳だ。

あらかた片付けたな。……勿論殺してはいませんよ。

怯える相手に、声をかける。

「己が非道を、理解したか。」

「ば、化け物め、くっ来るな。」

「そうか、己を恥じぬか、それでは、引導を渡してやる。」

じゃーんぷ。

「ゴッドハンドスマッシュ!!!。」

あー気持ちいいー。

「さてと、全員気絶してるみたいだが。大丈夫かな？死んでないよね。」

「マスターが、殺そうと思わなければ死にませんよ。」

「うむ、すばらしいチート。」

「大体、なんでも出来ますからね。」

「大体？出来ないことは？」

「死んで、3日以上経った人間を、生き返らせることは出来ません。三日たったら、他の世界、と言いますか、あの世に行ってしまうので。正確には、71時間48分12秒経った人間は、ですね。」

「他は？」

「後は、マスターの想像次第みたいですよ。」

「それは、本気出したら何でも出来るってことか。」

「そんな感じです。」

「んー、チートーウー。でも、嫌いではない。」

「まあ、良いや。ところでこの世界には、魔法ってあるのか？」

「んーとお、あるみたいですネ。」

「コメカミ押さえる姿が、可愛い。良いなあ小動物。さっきのは、データーの検索か？」

「そつか、じゃ、大体の無理は通るな。」

「馬車の扉を、やさしく叩く。」

「すいませーん。周りの盗賊達倒しましたよ。もう大丈夫です。」

？反応なし。あれ？もしかして……

扉を開けると、中で、血まみれで倒れている。娘さんが二人、それから、身なりの良いおじ様。

「ふおおおおおお。怪我してらっしゃる。」

血がスプラッタでグロイー。うーむ。さっき食った物を吐く……だが断る。

「彼の者達を癒し、健全な状態へ。」

ぺかー。

がこっつい。

変な音がした。これが癒し？気分下がる。

お、起きた。

「くっ、わしとした事が。」

おじさん、ウェイキング。グーテンモルゲン。

「盗賊は倒しましたよ。怪我してたので、癒しておきました。」

「本当か、ありがとう。本当にありがとう。礼の言葉も無い。」

「いえいえ、そんな。人として当然のことです。」

照れるね照れるね・・・

「すまないが、名前を覚えてくれないか？私は、バルベリトと言っ
」

名前。・・・・・・・・・・っはっ。

「本当に、名乗る名前が無かったーーーー！！！！！」

「マスター・・・・・・・・ふう。」

貴様らに名乗る名前は無い。(後書き)

素で忘れてました。

主人公の名前どうしよう。

ネタは、マシンロボです。かつこいいー井上和彦ー
アッテンボロー 009きやー

あれ？作文？

「タイムワーツ。」

時間が止まった。

「おお、出来るもんだ。しかし、玻璃も止まってるな。限定解除、玻璃。」

「マスター？」

「うむ、何で、自分の名前が思い出せないんだ？よく考えると、前の世界の記憶があいまいだ。家族や友達なんかの記憶が無い。」

「それはあ。」

もじもじしているな。自分もあまりにも変なことが立て続きたったので、良く分からなかったが、それを含めても、腑に落ちすぎている。

本来もつと、混乱したり、不思議なことが多くても良いはずだ。

「あれか？神になるために以前のしがらみを切られたと言う事なのか？」

「そうですね。すいません、言い出せませんでした。」

シユンと縮こまっている玻璃に、声を掛ける。

「お前が気にすることじゃないだろう。それに、むしろ感謝した方が
良いのかもしれない。どうせ帰れないのなら、辛いだけだろう。」

「マスター。」

「気にするな。」

肩に乗っている、玻璃の額を指先で搔いてやる。気持ち良いのか、
目を細めているのが可愛い。癒しだなあ、あの女神は、この辺
も見越して、玻璃を作らせたのかな？

でも、今度会ったら殴っておこう、軽く。

「何はともあれ、名無しでは始まん。キャラ立ちもしないしな。」

「そうですねえ、神様になったら、どうせ名前は貰うみたいですが
ど、とりあえず必要ですよ。」

「ふむう。何か良いのは無いかな？」

あ、そうだ。この世界にあわせていくかな。

「この世界で、多い名前と違って分かるか？ベスト10くらいで。」

「検索します。」

便利だのお。おれ自身に検索機能があっても良いかもな。でも、検
索中の玻璃も可愛いしな。まあ、とりあえず保留で。

「出ましたあ。全部言いますか？」

「いや、とりあえず1から3まで教えてくれ。」

「はい、上から、ドミンゴ、グレイン、マルチネスです。」

「却下！！4位以下も、一応頼む、順番に。」

「はい、ジョン、クリート、フーミン、ンガポコ。」

「もう良い……参考にならん、何だンガポコって。」

「伝説の勇者の名前から、もじったそうですよ。本当はウンゲイブルみたいですが、経年の変化で。」

「原型が、どっか行っただな。ご本人泣いてんじゃね？」

「さあ？どうでしょうねえ？それよりもマスターの名前ですよ。」

おー横道にそれまくってたな。どう考えたものやら。

ベンジャミン……

ラインハルト……

ブラフマズダー……

ディートハルト……レコメンシュタイン……ミント
ンパル……ジブラルタル……東カリマンタン……サ
ムター……マントヴァ……セヴァストポリ……リエ

ージユ・・・オルダニー・・・ダースベイダー・・・ヴァ
ハームート・・・スエゾウ・・・

んー名前が浮かばないなー。どうしよう？

リョウ？良いかも・・・ありがちだけど、それだけ良いって事だよな。

せめて漢字にはこだわりたいな。うーむ。

良・・・どうもな。涼・・・これも普通だな。亮・・・同じく。諒遼掠凌
怜凜寥嶺両了ん？了。了か、この字が良いかな。シンプルだし。サ
インが楽そう。

「決定。」

パンパカパンパンパーン・ドルドルドルドル《ドラムロール》

——了——（こうやって書くと話が終わったみたいw）

「了に決定しましたー。シンプルで良いよね。」

「分かりました、マスター。それとも、了様とお呼びしましょうか？」

「好きにしてくれ。」

とことんどっちでも良い。

「名前も決まったし、時間停止も解くか。」

「そうですねえ！」

それでは。

「プじゃ無い。」

そして時は動き出す。

「私は、了しやうと言います。いやあ、皆さんがご無事でよかったです。」

「あ、ああ、はい。そうですか、いやあ、了さん。本当にありがとうございました。」

一寸面食らってる？まあ、目の前でいきなり叫んだし。当然だね。

「ところで、車輪が壊されていますが、目的地は此处から近いのですか？」

唐突かな？でも、何か変なことに気付く前に、話をそらした方が良いでしょうね。

おやあ、顔色がものすごく悪いぞお。

「いえ、後1月は、掛かります。車無しでは、どれほど掛かることか。」

「タイムワッツー!!」

今回は、玻璃には影響は及んでいません。いいね、微調整。

「どうしよう！！思ってたのの3倍は長いよ。いきなり固定イベントは面白みが無いよ。」

「はい。」

スツと手を上げる玻璃。

「はい、玻璃さん。立って発言してくださいね。」

「はい、マスターが、馬車を直すと言うのはどうでしょう。引いた馬にしても、近くにいるはずですから、探してくれば。」

「採用。」

サーチ……サーチ……サーチ……ピーン

「発見。玻璃、力増やすからチョット行って持って来て。」

「はい、マスター。」

玻璃が飛んで行ったので（文字通り空を）自分は、馬車を治します。

「直れ。」

直りましたー。スムーズ、ベリースmooth。

「マスター、捕まえてきましたー。」

「良い仕事だ玻璃。すばらしい。チョット待ってて。」

おっさん（名前なんだっけ？）の記憶をチョット改ざんする。正確に言つと、さっきの話を無かったことに。

玻璃が、馬を馬車につなぎ、肩に戻ってきたのを確認すると。

「プじゃ無い！！。」

「私は、了じょうと言います。いやあ、皆さんがご無事でよかったです。」

「あ、ああ、はい。そうですが、いやあ、了さん。本当にありがとうございました。」

一寸面食らってる？まあ、目の前でいきなり叫んだし。当然だね。

あれ？デジャブ？まあ良いや。ん？戻しすぎた。ウン、知ってる。

「見たところ、馬車も無事ですし。もう大丈夫ですかね？」

「本当ですか、良かった、馬車が壊れていたら間に合わないところでした。」

「ああ、何か大事な御用事があつたんですね。それは良かった。」

「全て、助けて下さった了さんの御蔭です。出来れば、何かのお礼をしたいのですが。」

「いえいえ、期待して助けたわけではありませんから。お気になさらず。（そこは人間として、金目の物でもお礼に出すのが当然ですよね）」

「そう仰らず、せめてこれだけでも。」

（そうだ、それで良い。）って何これ？

「我が家に代々伝わる、モルモル様の像です。」

だから何それ？美味しいの？

「モルモル様ですか、いえ、御家に伝わるような物を頂くわけには行きません。（いるかい、そんなわけのわからない物体。）」

「そうですか。」

何ホツとしてるの、それそんなに大事？何なのモルモルって。美味しいの？見た目は苔の塊だよ。緑の塊だよ。モルモルって言うかモジヤモジヤ様だよ。

「それでは、せめてこれを。」

そう言っ出てきたのは、鞭でした。もうめんどくさいので貰っておくことにします。

「そうですか、それでは、ありがたく頂いておきます。」

「いえいえ、本当に、モルモル様でなくて宜しいのですか？」

「ええ、そんなにたいそうなものを頂くわけには行きません。（意味不明なものもいりません。むしろ邪魔です。）私は、向う所がありますので、これで。」

「この度はありがとうございました。また、どこかでお会いできましたら嬉しいですな。」

「そうですね。」

なんだか、あっさりと、去っていく馬車に向って手を振りました。

なぜ、モルモル様を推して来たのか、そして、次に出してきたのが鞭なのか、疑問は残りますが、気にしない様にします。

とりあえず、あの人たちが、無事に旅が出来たら良いなと思いました。

了

あれえ？作文！！

今回のネタ一覧

タイムワーツはパタリロのネタです。タイムワープと言い切らないと、時がどうしたんだろうと思って、一旦そこで腰をすえて考えるから時が止まる。ブじゃ無いと言えば、違ったのかと思ってまた動きだす。

鞭をご褒美にくれるのは、BLを無理やり友人に読まされたときに見たネタです。（作品名は覚えてません、むしろ、積極的に忘れま

した。)

あれ？作文は銀魂ですね。

名前をだらだら挙げるやり方と、スエゾウは、FSSファイブスターストーリーーズです。

挙げてる名前は、主に要塞のあった地名です。

ラインハルトは、銀河皇帝です。

フーミンは、マサルさんです。

ウンゲイブルは、ジークフリートの持つ剣、ノートウングの元になった名剣グラム、その別称の一つです。ウィルゲールと言う場合も有ります。

モルモル様は、名前を変えています。イメージは魔法陣グルグルです。(たしかプラプラ様？しりにパンを挟み、右手で鼻をほじり、左手でボクシングをしながら、命を大事にと叫んではならないという厳しい掟の神様)

以上ですかね。

あれ？作文？（後書き）

感想誤字脱字お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4374p/>

CUPID'S DEAD

2011年10月8日08時50分発行